

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第33巻 第2号



大白川からの白山

白山山頂を目指す数ある登山道の中で、砂防新道、観光新道に次いで利用者が多いのが岐阜県白川村の平瀬道です。その起点となる大白川は、登山者だけでなくキャンプや温泉に入る目的で来る人がたくさんいます。付近には白水滝しらみずのたきや白水湖はくすいこなどの景勝地と、湖畔にロッジと露天風呂があります。ブナの原生林の中に1つずつ分かれたキャンプサイトは、とても雰囲気の良いところです。そのキャンプ場の西端にある広場から白山山頂を望むことができます。左が御前峰、右が剣ヶ峰で、この方向からは2つの峰が、とがって見えます。この写真の撮影時期は8月中旬で、まだ雪渓が少し残っています。標高約1,250m～1,300mの大白川は、夏は涼しく秋は紅葉のみごとな場所で、一度は訪ねてみたいところです。

(上馬 康生)

白山室堂平のハイマツから 見えてくるもの

菅沼 孝之

ハイマツという木

ハイマツは「這う松」という意味で、マツ科の植物の主幹は、ほとんどが直立するのに対して、ハイマツは主幹がはつきりせず、地表にふせて広がります。ハイマツの葉は、枝に細い針のような葉が5個集まって付きます(図1A、B)。2個の葉が1束となるクロマツ・アカマツを二葉松と呼ぶのに対して、ハイマツやヒメコマツを五葉松と呼びます。ハイマツの雄花は新しい枝の下方側面に、雌花はその枝の先端につけます。白山では6月から7月にかけて開花しますが、雌花は年を越して翌年に実を結びます。



写真1 ハイマツ

ハイマツの果実は球果(まつぼっくり)とよばれ、マツ科の植物に共通ですが、種子にはアカマツやクロマツに見られるような散布に役立つ翼は持っていません(図1C)。秋に熟した種子を食用にする地域もありますが、本州の山々ではホシガラスがこの種子を餌とし、ハイマツの林縁や、ガンコウラン・コケモモの矮性低木群落の地中などに貯蔵します。ホシガラスは埋めたハイマツの種子を後で採食しますが、その残りが発芽して育つのです。



図1 ハイマツの形

A : 球果をつけた枝、B : 葉、C : 種子
「石川県樹木誌図譜」(1987年)より作成

ハイマツは、北海道、本州では白山を西限とし、南アルプスの光岳てかりだけを南限とする高山地帯に、海外では千島列島、サハリン、朝鮮、中国東北部の高山、シベリア東部、カムチャッカの寒帯に分布しています。北海道の無風地帯では高さが14mまで伸びた記録があるということですが、白山のハイマツの樹高は1m前後といったところです。地形によって違いがあり、風がいつも強くあたる風衝地では、特に低く這い、風向きの背後にあたる風背地との境の稜線では樹高が伸びて、2m近くに生長します。



写真2 白山（御前峰：標高 2,702m）山腹に広がるハイマツ群落

白山のハイマツ群落

白山のハイマツは、ほとんどが標高 2,000m以上に分布していますが、標高の低いところでは樹高の低いオオシラビソやダケカンバがまばらに混ざっています。標高の高いところではほぼ純群落を作り、ときにハクサンシャクナゲやタカネナナカマドが混ざっています。

さて、室堂平の周囲はハイマツ低木林、タカネナナカマド低木林で囲まれ、お花畑として知られる雪田植生も発達しています。一口に雪田植生といっても、コバイケイソウ群落、ミヤマキンボウゲ群落、ハクサンフウロ群落、ハクサンコザクラ群落、ミヤマキンバイ - クロユリ群落、ショウジョウスゲ - ネバリノギラン群落などが広がり、低木林とこうした雪田植生の移行地帯に、矮性低木群落としてガンコウラン群落、クロマメノキ群落、シラタマノキ群落、アオノツガザクラ群落などが多彩に展開しています。これは地形の微細な違いに応じて積雪量が微妙に違い、多様な雪田植生が展開しているためです（写真 3、4）。

積雪量は年によって異なりますが平均的な積雪量に応じて群落の境界が微妙に変わっていき、消滅する植物、新たに生育地を広げていく種類があるはず。そこで、雪田植生とハイマツ低木林に注目しました。タカネナナカマドなどのナナカマド類やミヤマハンノキは雪が多く積もっても耐えられます。ハイマツは雪が嫌いで、むしろ冬季の季節風が吹きすさび雪を吹き飛ばし、浅く積もるような酷寒の地でも耐えることができますが、大量の雪に埋まってしまうほうが致命的なようです。

温暖化の影響が心配されるようになりました。その影響は北極や南極、高山域など自然環境が厳しい所で現れやすいのではないのでしょうか。白山の室堂平でも 10 年ぐらい前に比べて、セーターなどの防寒着を何枚も着込んだりする必要がなくなりました。といっても、積雪はほどほどにあるようですが、雪田植生に咲く花を見ていると、積雪が融けるのが早くなっているためか、開花日が毎年少しずつ早くなっている気がします。



写真3 クロユリやミヤマキンバイが咲く雪田植生の中で育つハイマツ



写真4 クロマメノキやガンコウランの矮性低木群落の中に育つハイマツ

ハイマツの実生で何がわかるか

室堂平では1975年に植生調査を行い、調査結果に基づいて植生図を作成しました（「白山室堂平および弥陀ヶ原の植生」石川県白山自然保護センター研究報告第3集，1976年発行）。植生図は縮尺750分の1で描きましたが、当初はハイマツの実生（芽生え）の位置を落とすという目的がなかったのと、図面上に表すことができない小さい植生単位は省いていました。しかし、植生図をつくる基礎となった植生調査結果を総合した組成表には証拠が残っていました。タカネヤハズハハコ - アオノツガザクラ群集の典型亜群集に1か所、同群集のガンコウラン亜群集に6か所ハイマツが記録されていました。ハイマツが生育している調査区の調査面積は、2.25 m²から6 m²で、ハイマツが調査面積のどのくらいの面積を占めているかを示す優占度はすべて「+」でした。優占度は6段階で示され、そのうち「+」は調査面積の20分の1以下の面積を占める植物に与えますので、極めて小さい個体であるわけです。また、ひとつの調査区のなかにハイマツはたった1個体のみ生育していたことがわかります。実生が1個のばあいは+・1と書き表す所を省略して、+とのみ記録しますので、はっきり言えるわけです。したがってハイマツが占める面積は、各調査面積のごくごく小さな部分になります。多分、1975年当時のハイマツは芽生えて数年を経過したか、しないかといった小さい苗だったと思います。

この小さい苗は30年経った現在では、「盆栽の松」程度の大きさになっていることでしょう。そのような移り行きを想像しながら、室堂平に立って植生を眺めると、いろんな事象がよみがえり楽しいものです。ある場所では氷河期から間氷期への移行期、御前峰をはじめとする白山火山では最後の噴火後の、現在の山の形や植生の発達を想像できます。

さて、現実に戻って、ハイマツの稚樹を追うとなると、まずガンコウラン、クロマメノキ、シラタマノキなどの矮性低木群落や、雪田植生の縁辺部に目をひからせる必要があります。1975年当時も今もハイマツが生育している環境には違いがないわけです。芽生えてから良い条件に恵まれて、生き残っている個体が多いのにびっくりしました。室堂平の狭い範囲でハイマツの稚樹を35本も発見したのです（図2）。ハイマツが芽生えて最初に枝を出すまでに何年かかるかなど、初期生長を調べる必要があります。擬似環境をつくって調べるのも一法ですが、山で丹念に調べることができるのにこしたことはありません。種子を採ることから始めて、5年もかけずに回答が得られるでしょう。

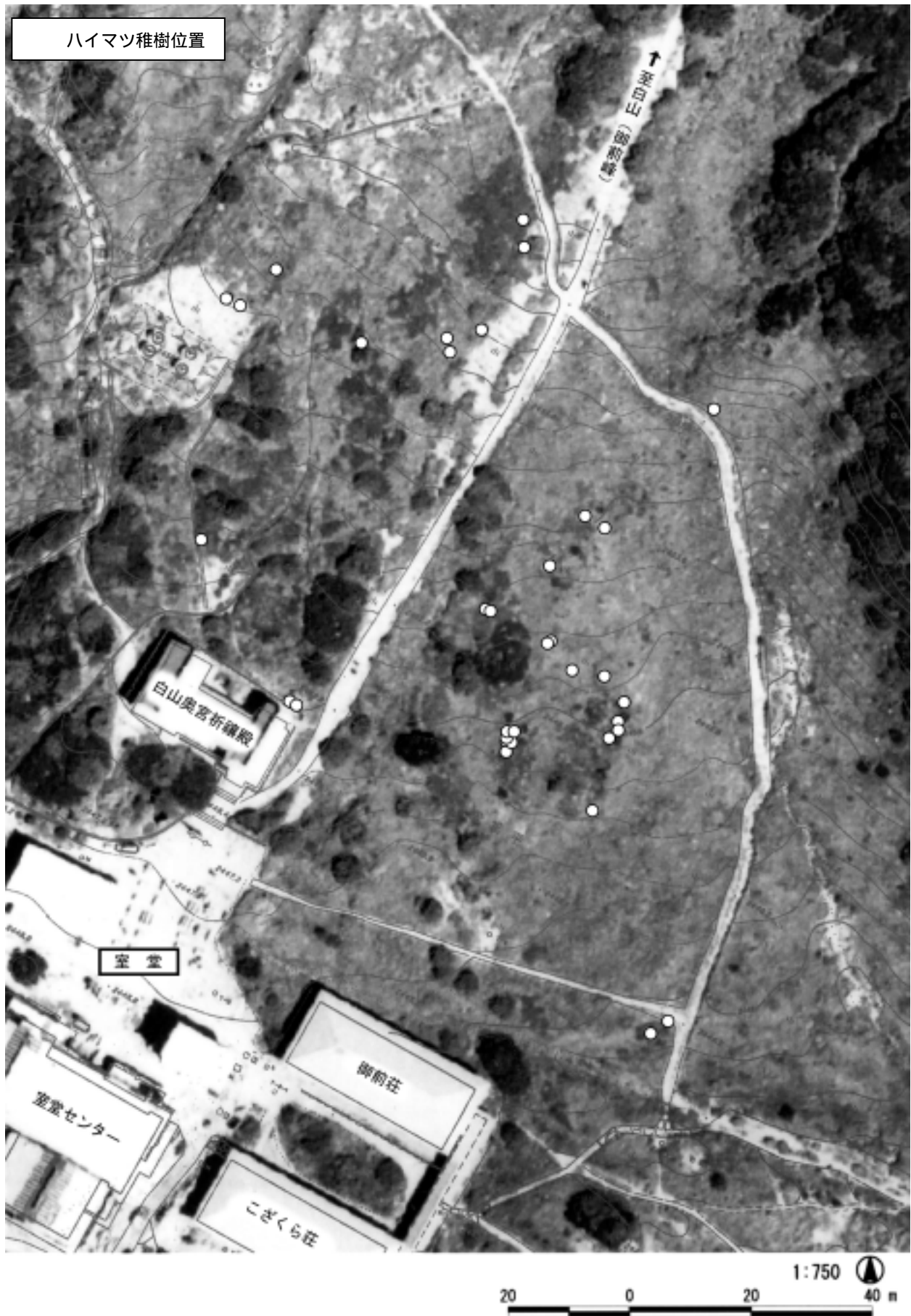


図2 ハイマツ稚樹の生育位置図（2005年7月現在）
 図中の実線は等高線（1m間隔）。写真撮影：福井県

ハイマツ地上部の年齢推定

簡単にことを進めるなら、測定したい個所で幹を伐って、年輪を数えるとよいのですが、ハイマツの実生の生長を見続けようとするなら、伐らずに正確に測定できる方法をとる必要があります。

調査は、2004年、2005年の2年間にわたって行いました。実生が生育していた位置はGPSで測定し、後日、750分の1のデジタル地形図上に落としました。また、ハイマツ群落として識別されない単独で生育しているハイマツを探して、最も長い枝の一部に目印として、ナンバーを印刷したテープを輪にして落ちないように、ホッチキスで止めました。

クロマツやアカマツ、ハイマツなどのマツ類は1年間に1節伸長します。枝先から、本年伸長分、昨年伸長分、1昨年伸長分と次第に根元へ向けてさかのぼっていきませんが、立地がよい場合は20年くらいまで数えることができます。当年分はいわゆる「みどり」と呼ばれる部分で（写真5）数本の「みどり」が輪状に派出します。完全に生長を終えていないと、伸長分を測定できないので、まず、昨年の枝先から1昨年の枝先までをノギスで測ります。この1年ごと枝の伸びを年枝といいます。こうして、枝先からの年枝の長さを測定可能な個所まで、さかのぼって測定します（写真6）。



写真5 アカマツ

写真中の枝先が何本かに分かれている部分がみどり。みどり（当年枝）はそれぞれ枝に生長する



写真6 経過年数（年枝）のとり方

1年ごとの枝の伸びがちがう

このデータで重要なことがふたつ判ります。ひとつは何年ごろ前に芽生えて定着したかということ、いつの年の伸長が大きいかということです。言い換えますと、ひとつ目は、何年ごろから実が増え始めたかということで、ふたつ目は、ハイマツにとって生長がよかった年はいつであったかということです。もちろん、個体数が多いほどデータの確実性は高くなるわけです。

マツはいわゆる「みどり」の先端に雌花を数個つける雌花枝と多数の雄花を「みどり」の下部につける雄花枝に分かれます。葉は4年ぐらい枝に着いていますので、出発点の節からしばらくは痛いのを辛抱して測定しますと、葉がついていない茎になり、測りやすくなります(写真6)。白山の室堂平において、雪田植生に生育しているハイマツの稚樹を探し、この1年間ごとの枝の伸びた部分を、ノギスを用いて正確に測りました。

ハイマツは何本も枝を出して、それが比較的良好に残っていますので、根元または根元近くまでさかのぼる事ができます。また、根元から出ている枝のどれが主幹かわからない株もありますので、測定に当たっては分枝数が一番多い枝を選びました。調査個体数は35本を数えましたが(図2)、そのうち、比較可能なしっかりしたデータがとれた30本について2005年を0とした逆算経過年数を比べますと、表1に示すような結果になりました。

表1 室堂平雪田植生に生育するハイマツ稚樹の逆算経過年数別個体数(2005年7月)

経過年数 (西暦)	3年 (2002)	4年 (2001)	5年 (2000)	6年 (1999)	7年 (1998)	8年 (1997)	9年 (1996)	10年 (1995)	11年 (1994)	12年 (1993)	13年 (1992)	14年 (1991)	15年 (1990)	16年 (1989)	17年 (1988)	18年 (1987)	19年 (1986)	20年 (1985)	計
個体数	1	1	2	3	4	2	1	2	5	2	3	1	1	1	0	0	0	1	30

年枝の伸長量については、昨年と今年の計測方法に統一がとれていないので、2005年に測定した値を見ると、2年、3年、10~13年前は他に比べて数値(伸長量)が大きくなっています。2006年はこの数値を確かなものにして、ハイマツの年枝の伸長量が温暖化の影響などを示すか、どうかを明らかにしたいと考えています。

調査にご協力をいただいた辰巳博史氏、および的場典子(2004年)、外山治美・越智彩子(2005年)の諸氏に厚くお礼申し上げます。

(元奈良女子大学教授)

参考文献

佐藤利幸(2004)ハイマツ. プランタ, 94, 26 - 32.(株)研成社.

白山麓にあった分校 - 白山麓出作り地の教育事情 -

小川 弘司

明治の始まりとともに山間地の白山麓にも近代教育の波が押し寄せ、学校がつくられていきました。しかし、山中に集落が点在していた白山麓には大規模な学校はできず小さな学校がいくつもつくられ、そのまた奥により小さな学校である分校がつくられました。今回、この白山麓の分校を中心とした明治以降の学校教育事情について紹介したいと思います。



白山麓での近代教育のはじまり - なぜ多くの学校・分校があったのか -

「邑二不学ノ戸ナク、家二不学ノ人ナカラシメン」との方針の下に、明治5年(1872)8月に学制が發布され、白山麓の各地に学校がつくられていきます。その数は明治10年までに旧白峰村、旧尾口村、旧吉野谷村、旧鳥越村、旧河内村、旧新丸村の範囲で、19校を数えました。当時の白山麓

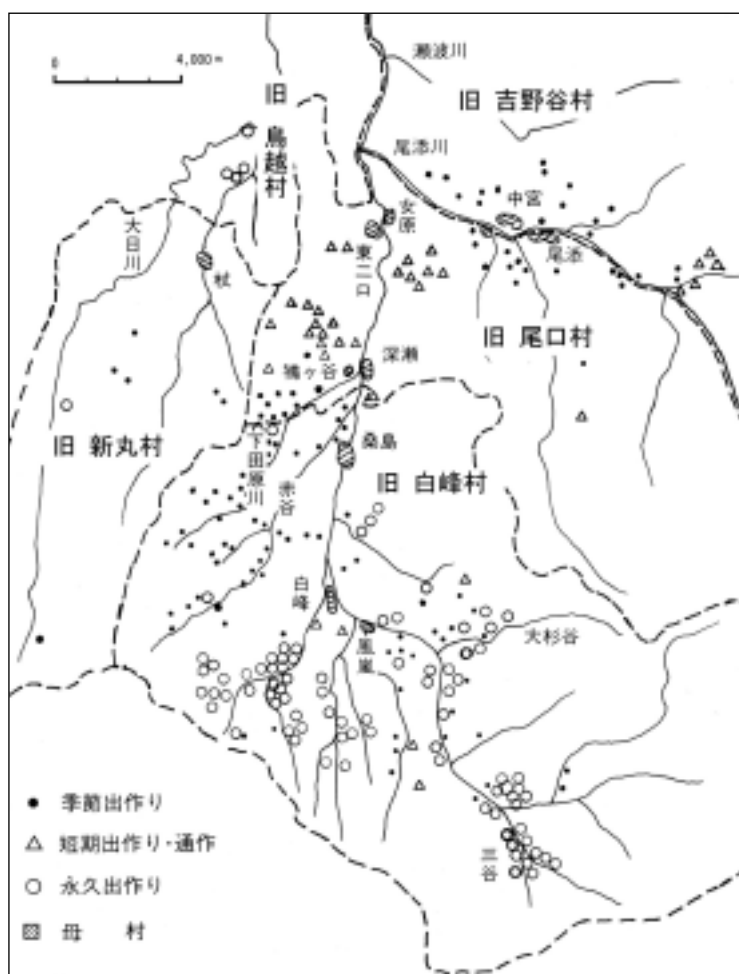


図1 昭和30年頃の出作り分布
「白山の出作り」(1986年)より作成

は行政単位も小さく、いくつもの村にわかれていたので原則その村ごとに学校がつくられました。さらに村の中心集落から離れた山の奥には分校がつくられていきました。近代教育がはじまったこの時期は全国的に見ても多くの学校がつくられたと考えられますが、それにもまして白山麓には多くの学校がつくられました。それは、白山麓特有の事情があったからです。図1を



写真1 旧河内村にあった奥池夏季授業所
撮影時期不明。「河内村史上巻」(1981年)より引用

見てください。これは白山麓に散在していた「出作り」と呼ばれた民家の位置を示したものです。「出作り」は母村を離れて山中に住居を構え、そこで、焼畑や養蚕・炭焼きなどを行う生活形態です。平地が少ない白山麓で自給用の食糧を生産し、現金収入を得るための手段として発達した農耕・生活形態です。これは、昭和30年代の分布図ですが、それより以前はもっと多くありました。図中の出作り戸数はおよそ240戸ですが、明治末に調べられた記録(「白山麓に於ける出作り地帯(一)」1927年発行)によれば、その出作り戸数は480戸(旧白峰村・旧新丸村・旧尾口村・旧鳥越村・旧吉野谷村の合計の数)にのぼりました。「出作り」は一家総出で山中に入るの、子供たちも当然一緒です。そのため、この子供たちを教育するための分校などがつくられたわけです。また、交通事情が未発達のために比較的近場であっても分校がつくられたりしたこともあったと考えられます。

出作り地の教育事情 - 明治・大正の頃 -

史料をもとに(表1)、出作り地を中心とした白山麓の教育事情について見て行きましょう。「出作り」は春から秋に山中で生活し、冬には母村(中心集落)で生活する「季節出作り」、1年を通して山中で生活する「永久出作り」、また長くても1週間程度の滞在しかしない「短期出作り」に分けられます(図1参照)。「季節出作り」をしている農家は山中で生活するために春から秋にかけて母村にいなくなります。親と一緒に山に入った子供たちは学校へ行きたくとも行けません。このため、母村の学校には欠席者が多く出るようになりました(表1)。また、そもそも学校へ行くと言う習慣が定着しない時期でありましたから、貴重な労働力でもあった子供たちは学校へ行かせてもらえないという事情も考えられます。

いずれにしても教師の側も児童の成績が思うように上がらず(表1)、救済策を講じても十分な効果が出ないことに対し、悔やんでいる様子が分かります(表1)。学校では父母懇談会の席上で児童を学校へ出席するように依頼をしたり(表1)、そもそも授業日数を確保するために冬休みを短くして、夏休みを長くする方法が取られたりしました(表1)。

そこで、いっそのこと山中の出作り地に学校を作ろうということになりました。しかし、教育費の乏しい各村にとって学校の設置は大きな負担です。石川県としても学校教育の浸透を図る上で出作り地での教育を支援します。明治の末には当時の石川県知事が白山麓を視察した際に、この教育

表 1 出作り地教育に関する史料

<p>十二月今后冬季休業ハ夏季休業ニ合併スル事ニ認可ナリタリ其故タルハ当地ハ夏季ハ奥山へ出稼シ冬季ハ出村（山）シテ出校生多キ以テナリ</p> <p style="text-align: right;">（明治 17 年「桑島小学校 学校沿革史」より）</p> <p>教育八年一年盛ンナルト 土地ノ状況ハ奥山出稼ギノ為ノ夏日ノ出席児童ハ極メテ僅少ニシテ冬季ハ^{マヤ}稍多キト、夏日欠席^{アガ}ノ為メ充分ノ成績^{アガ}挙ラズ</p> <p style="text-align: right;">（明治 23 年「深瀬尋常小学校 第一冊学校沿革史」より）</p> <p>夏季奥山へ出稼ギスルモノハ可及（できるだけ）本校へ出席セシムルコト</p> <p style="text-align: right;">（明治 43 年「桑島尋常小学校 父母懇話会記事」より）</p> <p>当村ハ山間僻地ニシテ耕地狭、到底終年居村生活不可能ナレバ夏季約半数以上ノ住民ハ近キ八一里遠キハ七八里ノ他国領^{マデ}ノ奥山へ出稼スルノ慣例ナレバ其期間児童ノ出席ニ大影響ヲ来タシ之レガ救済策ヲ講ズルモ充分ノ効奏シ難キハ常ニ識者ノ^{イカン}遺憾トスル所ナリ</p> <p style="text-align: right;">（明治 43 年 9 月「白峰尋常高等小学校学校教育ト社会トノ調査事項」より）</p> <p>従来是等農家ノ子女ハ此期間全く教育を受くること能ハざりしナリ、明治四十三年夏、李家石川県知事管内を巡視して白山に登り、此地を過ぎて親しく其状況を視、其熱心に感じ県費を割きて毎年五百円ツノ奨励金を^{マデ}下付するに至れりと云ふ、出作教授所ハ四月より十月に至る間開始するものにして、目下ハ河内谷、赤岩、大道谷、赤谷及下田原ノ五ヶ所にあり、生徒は何れも三十名乃至六十名あり。</p> <p style="text-align: right;">（明治 44 年「白山登山案内」より）</p> <p>冬季休業ヲ毎年十二月三十一日ヨリ翌年一月二日^{マデ}迄ノ参日間トシ其前後ニ於テ十一日間ヲ減ジ之ヲ加エテ夏季休業を四十二日間ニ伸長スルコト 夏季休業日ハ地方農蚕業ノ繁閑ヲ酌量シ七月十五日ヨリ八月廿^{ニシヨフ}5 日迄四十二日間トスルコト</p> <p style="text-align: right;">（大正 2 年「桑島小学校 学校沿革史」より）</p>

表記について

漢字は旧字体から新字体に改めた。読みやすくするために読点「、」を付した。判読不可能な文字は ^{マデ} で示した。明らかな誤字は修正した。読みにくい言葉にはルビを入れ、わかりにくい言葉には注釈（かっこ書き）を入れた。

状況を憂慮し白峰村（現白山市）に 500 円の奨励金を与えました（表 1）。これをもとに白峰村では授業所と呼ばれた小さな学校が設置されました。他村でも「出作り地教育奨励金御下付願」を知事宛に提出し奨励金を得て学校の設置・運用等に役立てるようになります。

こうして明治から大正にかけて巡回授業所、特別授業所、出作り授業所、分教場などと呼ばれた小さな学校がつくられていきました。それらの小さな学校は 40 校以上にのぼるほどでした（表 2）。学校といっても当初は建物がなかったために民家の納屋や道場（白山麓の集落に存在した信仰行事や信仰修行の場）を借りるなどして始まった粗末なものです。規模が小さく、児童数が 10 名にも満たない学校もありました。

これらの学校はすぐに無くなったものもあり、また統廃合も進みましたが、昭和に入り第 2 次大戦後の昭和 30 年代になっても、山中の出作り地に人々が住んでいたため（図 1 参照）、残ったものも多く、山間地での子供たちの教育を支えていました。

表2 明治末～大正年間に白山麓にあった学校

学校名	分校等	旧村名
白峰尋常高等小学校	赤岩巡回授業所、河内谷巡回授業所、明谷巡回授業所、大道谷巡回授業所、風嵐冬季巡回授業所	旧白峰村
尋常科桑島小学校	赤谷巡回授業所、下田原巡回授業所	
深瀬尋常小学校	鴉ヶ谷冬季分教場、釜谷冬季分教場、五味島冬季分教場、鴉ヶ谷出作地授業所（夏季）？	旧尾口村
女原尋常小学校	東二口冬季分教場、瀬戸冬季分教場、瀬戸野臨時授業所	
尾添尋常小学校	東荒谷出作地授業所（夏季）、東荒谷冬季分教場	
吉野谷南尋常小学校	瀬波冬季分教場、木滑新冬季分教場、瀬波滑谷特別授業所、木滑新出作授業所（夏季）	旧吉野谷村
吉野谷南尋常小学校 中宮分教場	湯谷出作授業所、木和田原出作授業所、清水平出作授業所	
吉野北尋常小学校		
上吉谷尋常高等小学校	河原山分教場	旧鳥越村
阿手尋常小学校	数瀬冬季分教場、揚原特別授業所	
鳥越尋常高等小学校	柳原分教場、左礫分教場、鷲巣特別授業所	
上野尋常高等小学校		
河合尋常小学校		
新保尋常小学校	須納谷分教場	
丸山尋常小学校	杖分教場、小原分教場	旧新丸村
白山尋常小学校 (旧鶴来町)	江津分教場、内尾分教場、下折冬季分教場、久保分教場、奥池授業場	旧河内村

学校名が途中で変更になったものは、原則明治末時の学校名を優先した。この中には一時期だけ設置されたものも含む。旧新丸村は現在小松市。それ以外の村は現在白山市となる。

中宮温泉夏季分校 - 分校での学校生活 -

戦後も残っていた分校のひとつに中宮温泉夏季分校がありました。その前身は湯谷出作授業所(表2)であり、場所は尾添川上流部の旧吉野谷村(現白山市)中宮の現在白山自然保護センター中宮展示館のある場所にありました。当地には中宮温泉があり、また周辺には出作りで中宮集落の人たちが春から秋の間、暮らしていました。その子弟のための夏季分校が設置されていました。普通分校といえば通年型の分校や冬季分校が上げられますが、白山麓の場合にはこのような夏季分校がいくつもつくられていました。また当時は中宮集落の背後の山の稜線付近に鈴原夏季分校(戦後に設置)も設置され、周辺の出作り地の子供たちが通っていました。中宮温泉夏季分校に通った外一夫さん(昭和14年生まれ)によると、同級生は8人いましたが、そのうち4人が中宮温泉夏季分校、2人が鈴原夏季分校そして本校には残り2人だけで、分校へ通っている生徒の方が多かったそうです。

中宮温泉夏季分校は、当初は温泉旅館や出作り小屋の一室を借りての寺子屋形式での授業が行われていました。その後中宮集落にあった納屋を移築して新たな校舎が建てられました。建物は二階建ての質素なもので、一階が教室に、二階は先生の部屋にあてられていました。先生はひとりだけで、近くの出作り小屋や温泉旅館に宿泊して教鞭をとっていました。教室と言っても8畳くらいの広さの床張りの部屋で黒板、オルガン、机くらいしかありませんでした。電気がつくようになったのも昭和32年からでした。生徒の数は数人から多い時は10数名で、小学校1年生から中学校3年生までまたがっていました。時には、入学前の幼児も親の仕事の関係で連れて来られていたようです。そんな生徒たちがひとつの教室に机を並べ勉強していました。しかし先生は一人だけだったの



写真2 中宮温泉夏季分校前での先生と子供たち
昭和30年頃。写真提供：外一夫さん

で、授業もそこそこに課外授業が多かったようです。小学校1年生から中学校3年生までこの分校に通った西山喜一さん(昭和20年生まれ)によると、分校前の蛇谷の河原でゴリを獲ったり、イワナを釣ったり、春には山で山菜を採ったり、秋には木の実やアケビを採ったり、当時の思い出を語ってくれました。学年の垣根を越えて、まるで兄弟姉妹のように仲が良かった様子がしのばれます。この分校も実質的に昭和30年代には姿を消してしまいました。



写真3 分校での授業
白峰小学校赤岩分校(昭和30年代)
写真提供：白峰小学校

たくさんあった白山麓の学校も、現在は5校だけを残すこととなりました。白山麓は平成17年(2005)2月1日に1市2町5村が大同合併して白山市となりました。人口流出が続く白山麓ではこの合併を契機として現在の学校も将来的に統廃合されるかもしれません。かつては何10校もあった学校がこんなに少なくなっている姿には、時代の流れを感じざるを得ません。現在はその学校跡がまったくわからなくなっているところもあります。分校は少人数であることが、それ自体マイナス面もあったと思いますが、山中の学校は山自体が大きな学校ともいえ、山に生きていくための大切なことを教えてくれたのではないのでしょうか。分校で学んだ人々の心にはいつまでもその思い出や生きる知恵が残されていることでしょう。

(白山自然保護センター)



自然へのインタビュー

白山自然ガイド ボランティア

中宮展示館で研修講座

白山自然ガイドボランティアの第2回研修講座は7月3日、白山市中宮の中宮展示館で「楽しみながら自然に触れるとは」をテーマに開かれました。

中宮展示館と白山市白峰の市ノ瀬ビジターセンターでガイドウォークを実施している白山自然ガイドボランティアの皆さんが参加しました。日本ネイチャーゲーム協会インストラクターの木谷一人さんらの指導で様々な自然の表情を探す「フィールドビンゴ」や自然の音を絵や記号で表現する「サウンドマップ」づくり、「自然へのインタビュー」など、いろいろな切り口で自然に親しむガイド方法を学びました。

中でも「自然へのインタビュー」では参加者が思い思いの岩や木、溪流、草花などを選び、これに質問する形でインタビューカードを作りました。それを互いに披露しましたが、いずれも自然への思い入れたっぷりのインタビューになっていました。



様々な切り口で自然観察の方法を試みるガイドボランティア

インタビューカード

- ・お名前とお年を教えてください。
名前？ 今はやりのタッキーじゃ。千年、2千年？ 覚えておらん！ 1万年かな。
- ・誰か遊びに来ますか？ 仲良しさんはいますか？
今はワシは潤れている時期だから、誰も来ん！ 時々カモシカ君やサル君が近くに来るかな。上を見ると運がよければイヌワシ君が近くに見えるゾ。
- ・ここにいての一番のお気に入り？
やっぱり春かなあー。雪融けの水がゴウゴウとワシの背中から押し寄せて来て、ワシの腹を伝って眼下の谷川に落ちて行く様子は何とも言えん快感！それが樹林や葉の元になる。人間様もそれが命の元じゃ。感謝、感謝。

参加者がつくった自然へのインタビューの一例。インタビューの対象は谷川にかかる滝のようですね。

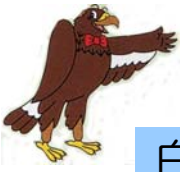


中宮展示館のキャラクター・いぬわし君

白山自然ガイドボランティアによる ガイドウォーク

5月～10月の土、日、祝日の午前10時～正午、午後1時～3時の1、2時間。無料。当日受付。団体（20人程度）の場合はあらかじめご連絡下さい。

市ノ瀬 集合場所：市ノ瀬ビジターセンター
(0761-98-2504)
中宮 集合場所：中宮展示館
(0761-96-7111)



白山まるごと
体験教室

芽吹きを森を満喫

新緑のブナ原生林 市ノ瀬ビジターセンター



「新緑のブナ原生林」は5月29日、市ノ瀬ビジターセンターからチブリ尾根（別山・市ノ瀬道）の水場までを往復するコースに親子連れら 33 名が参加して行われました＝写真左＝。

ブナに関するクイズを楽しんだ後、ブナやトチノキの大木が立ち並ぶ太古の森を歩き、鮮やかな木々の芽吹きをはじめ、ラショウモンカズラやニリンソウなど、咲き誇る春の花を楽しみました。

川虫と川遊び

中宮展示館

「川虫と川遊び」は7月31日、白山市中宮の中宮展示館で子ども連れを中心に 33 名が参加して行われました。参加者は展示館前の蛇谷の清流に裸足で入り、今ではなかなか出来ない川遊びを楽しみました。イワナやカジカをはじめ、サワガニ、ナガレヒキガエル、カゲロウやカワゲラの幼虫などが見つかり、そのたびに歓声がありました。午後は雨となったため、展示館で川の生き物の話を聞いたり、映像を見たりしました。

サワガニ見つけ！



清流の生き物
を探す参加者

1億数千万年前の タイムカプセル

化石を探す
参加者

化石で探る太古の白山 白山自然保護センター本庁舎



「化石で探る太古の白山」は8月28日、白山市瀬戸の尾添川の河原で、子ども連れを中心に 33 名が参加して行われました。

河原にころがる石のうち、化石が出やすい石とそれ以外の石のちがいについて説明を聞いた後、実際に石をハンマーで割って化石を探しました。子供ばかりでなく、大人も夢中になって石を割っていました。今回はたさんの二枚貝や巻貝の化石が見つかりました。午後からは白山自然保護センター本庁舎で、1億数千万年前の白山地域の環境についての説明を聞いたり、センター所蔵の化石を見たりしました。



県民白山講座

白山登山と高山植物の集い
鶴来総合文化会館クレイン

心は
お花畑へ

会場を埋めた参加者

「白山登山と高山植物の集い」は夏山シーズンを前に6月18日、白山市の鶴来総合文化会館クレインで登山愛好者ら193名が参加して開かれました。県自然解説員研究会の三谷幹雄、山下光信両氏や白山自然保護センターの林哲主任研究員らが白山の高山植物、気象、動物などについて講演し、参加者は白山登山への期待に胸を膨らませました。会場では写真展や各種資料の配布も行われました。



白山の高山植物と低地から入り込んだ植物
石川県文教会館

山を登るオオバコ



「白山の高山植物と低地から入り込んだ植物」は7月10日、金沢市の石川県文教会館で15名が参加して開かれました。三谷幹雄県自然解説員研究会会長、柳生敦志白山雑草研究同好会長らが白山に本来生育している高山植物と、オオバコなど低地から入り込んだ植物について紹介し、9月に実施する外来植物の除去作業へのボランティア参加を呼びかけました。

農業、酒、企業、保養…

手取川の水の恵み 白山国立公園センター

映像を使った説明

「手取川の水の恵み」は8月7日、白山市白峰の白山国立公園センターで25名が参加して開かれました。東野外志男白山自然保護センター次長が手取川の地形と地質、坂野貴子さんら白山砂防女性特派員3名が白山砂防の歴史について講演しました。西田谷功白山市教育委員は「水の恵みと人々の暮らし」と題して話し、川水は農業用水に、地下水は加賀菊酒やハイテク企業の立地に、さらに環境や景観は学習や保養の場として役立つなど、多様な手取川の水の恵みについて紹介しました。

ブナオ山観察舎 11月20日オープン

白山市一里野のブナオ山観察舎は今シーズンも11月20日にオープンを予定しています。ニホンカモシカ、ニホンザル、イヌワシ、クマタカなど、厳冬を生きる野生動物を観察してみましよう。

ミニ観察会を実施

かんじきをはいて雪の森を歩くミニ観察会も実施します。野生動物やその足跡を見つけたり、雪の様々な表情を観察したりします。12~4月の土、日、祝日に1、2時間。観察舎職員がご案内します。



ほかに
会いに来てね!



お知らせ

白山まるごと体験教室

かんじきハイキング

日程：2月19日（日）10:00~15:00
会場：白山市一里野・ブナオ山観察舎
定員：30名

対象 子ども（小学生以上）~大人
参加費 無料です。
申し込み・問合せ 電話で白山自然保護センター（0761-95-5321）まで。1か月前から受け付け、定員に達し次第締め切ります。

<編集・谷野 一道>

センターの動き (6月21日～10月20日)

- | | | | |
|------|------------------------------------|----------|---------------------------------------|
| 6.21 | 夏山登山に関する遭難救助対策会議 (白山市白峰) | 8.29 | 石川県ツキノワグマ対応研修会 (本庁舎) |
| 6.26 | 石川県自然解説員研究会養成講座講師 (金沢市) | 8.31 | 白山夏山閉山祭 (白山室堂) |
| 6.27 | 白山自動車利用適正化連絡協議会 (本庁舎) | 9. 3 | 野々市町生涯学習課案内 (中宮展示館) |
| 7. 3 | 白山自然ガイドボランティア研修講座第2回
(中宮展示館) | 9.3-4 | 白山外来植物除去作業ボランティア (南竜ヶ馬場) |
| 7. 7 | 白山自然保護調査研究会幹事会 (金沢市) | 9.4-5 | 白山クリーンアップ登山 (白山) |
| 7.10 | 白山講座「白山の高山植物と低地から入り込んだ植物」
(金沢市) | 9.5-6 | 野生鳥獣保護管理技術者育成研修 (金沢市) |
| | とやま環境財団案内 (中宮展示館) | 9.10 | いしかわシティカレッジ公開講座講師 (金沢市) |
| 7.19 | 白山市議会観光対策特別委員会視察
(市ノ瀬ビジターセンター) | | 自然と人との共生を考える～クマとどうつき合うか～シンポジウム (金沢市) |
| 7.23 | あなたもブナの木を育てましょう (中宮展示館) | 9.13-14 | 登山施設運営整備現地視察 (双六岳) |
| 7.30 | 七尾児童会館案内 | 9.17 | 白山まるごと体験教室「秋の音、ネイチャーコンサート」 (中宮展示館) |
| | 白山市若宮子供会案内 (中宮展示館) | 9.17-18 | 白山外来植物除去作業ボランティア (白山室堂) |
| 7.31 | 白山まるごと体験教室「川虫と川遊び」
(中宮展示館) | 9.25 | あなたもブナの木を育てましょう (中宮展示館) |
| 8. 1 | 白山市アドベンチャーキャンプ案内 (中宮展示館) | 9.30 | 第1回環白山行政等連絡会議 (白山市八幡町) |
| 8. 7 | 県民白山講座「手取川の水の恵み」 (白山市白峰) | 10. 2 | 石川県白山ユネスコクラブ講演 (中宮展示館) |
| 8.24 | 松任博物館案内 (中宮展示館) | 10.12 | 金沢市米泉小学校案内 (市ノ瀬ビジターセンター) |
| 8.25 | 石川県庁インターンシップ事業学生受入れ
(本庁舎・中宮展示館) | 10.13-14 | カモシカ保護指導員及び保護行政担当者会議 (三条市) |
| 8.28 | 白山まるごと体験教室「化石で探る太古の白山」
(本庁舎) | 10.14 | 白山市朝日小学校案内 (中宮展示館) |
| | 大阪市立扇町高校人文学科演習講師 (中宮展示館) | 10.16 | 白山まるごと体験教室「紅葉のブナ原生林」
(市ノ瀬ビジターセンター) |
| | | 10.19 | 女性県政バス (中宮展示館) |
| | | 10.20 | 女性県政バス (中宮展示館) |

編集後記

今年の6月1日に白山に登ってきました。まだまだ残雪の多いこの時期、白山山頂部の室堂平や弥陀ヶ原は一面雪で覆われていました。しかし、ハイマツの広がっているところはほぼ雪が無く、白銀の世界の中にハイマツの色鮮やかな緑が印象的でした。ハイマツは白山の高山域を代表する植生のひとつです。本号では、菅沼孝之さんにハイマツの1年ごとの枝の伸びを丹念に測定することから、過去の気候環境を類推する新しい試みについて報告いただきました。地道な手間のかかる調査ですが、地球温暖化等の影響による白山の変化を知る上で興味の持たれる研究です。

今回、白山麓にあった分校についてまとめるにあたり、小学校に保管されている「学校沿革史」を見せていただき、昔の記録をいろいろと調べてみました。そこには学校の年ごとの行事などが記録されており、特に戦時中の記録に興味をそそられました。戦勝祝いで全校が参加して提灯行列に参加したとか勤労作業や防空訓練が行われたこと、もんぺ着用が義務付けられたこと、先生が出征兵士として応召されたこと、戦争末期の昭和19年には小学校の高等科2年の生徒が海軍志願兵に全員受験したというようなことも書かれていました。今の時代の学校とはぜんぜん違う厳しさや物悲しさが感じられ、ついつい読んでいる手を止めてしまうこともありました。(小川)

目次

表紙 大白川からの白山	上馬 康生 ... 1
白山室堂平のハイマツから見えてくるもの	菅沼 孝之 ... 2
白山麓にあった分校 - 白山麓出作り地の教育事情 -	小川 弘司 ... 8
はくさん 山のまなび舎だより	谷野 一道 ...13

発行日 2005年10月20日(年4回発行)

編集発行 石川県白山自然保護センター

〒920-2326 石川県白山市木滑又4

はくさん 第33巻 第2号(通巻136号)

TEL. 0761-95-5321 FAX. 0761-95-5323

URL <http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/>

E-mail hakusan@pref.ishikawa.jp

印刷所

前田印刷株式会社